

イザヤ 53 章 4-12 節

へブル人への手紙 4 章 12-16 節

マルコによる福音書 10 章 35-45 節

本日の旧約日課は、「苦難の僕」について記されています。聖書日課は、53章4節からですが、この「苦難の僕」の部分は、52章13節から始まっています。「新共同訳」の小見出しは、「主の僕の苦難と死」ですが、新しい「聖書協会共同訳」では、「主の僕の苦難と栄光」となっています。この小見出しを内容の要約と考えますと、この「苦難の僕」の部分は、その死を告げるだけで終わりわけではありませんから、「聖書協会共同訳」の小見出しの方が、内容を伝えていると思います。

この箇所は、「見よ、わたしの僕は栄える。はるかに高く上げられ、あがめられる。」(イザヤ 52:14) で始まり、「それゆえ、わたしは多くの人を彼の取り分とし、彼は戦利品としておびただしい人を受け。彼が自らをなげうち、死んで罪人のひとりに数えられたからだ。多くの人々の過ちを担い背いた者のために執り成しをしたのはこの人であった。」(イザヤ 53:12) で終わっています。この「苦難の僕」が、主なる神様に背いたイスラエルに対して、「執り成し」をした、つまり罪の贖いとも呼べるような業を行ったことが告げられています。しかし、その業は「苦難の」という表現からもわかる通り、輝かしい活動や何かを達成した結果ではありません。むしろ、多くの人々が気付かない、あるいは避けて通るような出来事を通してなされたと語っています。

この「苦難の僕」が誰であるかを明確にすることは困難です。特定の人物がいた、特定の人物ではなく苦しむ人々全体を指している、あるいはイスラエルという集団自体を指しているなど、いろいろと想像できますが、歴史的に確認することは難しいのです。しかし、大切なことは、それが誰かではなくその姿です。そして、人々と主なる神様の両方に見捨てられた姿の人、そのような人を通して、主なる神様とイスラエルと間の「執り成し」がなされる、罪の贖いがなされるということです。このような考え・主張があるということは、「旧約聖書」の中でも特徴的です。なぜならば、主なる神様とイスラエルとの間の「執り成し」は、通常、神殿祭儀や律法を守ることを通して、あるいは預言者を通して行われるからです。

しかし、ユダヤ教の歴史の中では、この「苦難の僕」は、それほど重要性を帯びることはあまりありませんでした。また、この「イザヤ書」が書かれた後の方が、律法を守ることと、神殿祭儀を行うことがより確立していく時代を迎えます。そして、わたしたちキリスト者の方が、この「苦難の僕」に重要性を見出したといえます。ここに描かれている事柄が、イエス様の出来事を理解しようとするときの助けとなるからです。

この箇所が、それが書かれてから数百年後に登場する、ナザレのイエスのこ

とを示す、いわゆる未来を予告する予言であるかどうかはわかりません。しかし、全く無関係であるとも思えません。少なくとも、イエス様が、まったく何の前提もなく登場したのではなく、「旧約聖書」に語り続けられた、主なる神様とイスラエルとの歴史を経て、登場したことを暗示していると思います。それは見方を変えれば、最初の教会の人々（おおざっぱな言い方ですが）にとって、イエス様について理解するときに、この「苦難の僕」が大切なヒントであったということを示しています。

教会は「マルコによる福音書」が書かれるまで、イエス様についてまとまった資料を持っていませんでした。イエス様を理解する助けとなるのは、イエス様と出会った人々の証言と、『聖書』（旧約と続編）でした。その理解は、「新約聖書」を含めた『聖書』を持ち、三位一体の教理を確立しているわたしたちの理解とは、異なる部分もあると思います。しかし、「イザヤ書」の「苦難の僕」とイエス様の出来事を照らし合わせたとするならば、今日でも変わらない大切なことを示していると思います。

さて、そのイエス様がキリストであることがはっきりするのが十字架と復活です。しかし、その出来事の意味は、当事者であった弟子たちにとっても、弟子たちによって信じるようになった人たちにとっても、すぐにその意味が理解できるような事柄ではなかったと思います。言葉自体の意味も変わっているからです。主イエス・キリストという表現一つとっても、ことに、キリスト（メシア）という意味は大きく変わっています。十字架にかかり死という敗北を迎えるキリスト（メシア）、この出来事は、「旧約聖書」にある従来通りの意味の中で捉えるならば、意味的・論理的に矛盾しているのです。この時、本日の旧約日課の「イザヤ書」の文言は、十字架にかかって死を迎えたが、復活されたキリスト（メシア）の意味を、理解する助けになったと思います。そのような方を、主なる神様が「執り成し」として用いることがあると示しているからです。

今日の福音書の箇所は、イエス様と弟子たちがエルサレムに入場する直前の出来事であり、イエス様が三回目の受難予告を行った後の出来事です。三回という回数は、強調の回数とも言いますが、イエス様が十字架の苦しみを受けることの意味を、しっかりと理解しなさいと強調していると思います。物語の流れを考えても、場面はユダヤの政治的宗教的中心地エルサレムに入場する直前です。これから何が起こるのかと緊張感が高まる状況です。しかし、そのような緊迫した状況と裏腹に、8章ぐらいから明確になって来た、弟子たちのイエス様への無理解・誤解は、よりあからさまになって来ているのです。本日の福音書の箇所もその無理解のお話です。

本日の箇所は、ゼベダイの子ヤコブとヨハネがイエス様に願い事をするところから始まります。この二人は、ペトロ、アンデレと一二人の使徒を構成する二人であり、弟子たちの中でも主だった人たちです。彼らは「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが」（マルコ 10：35）とイエス様に語りか

けたのですが、その願いとは、「**栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください**」(マルコ 10 : 37) というものでした。弟子たちは、自分たちの従っている先生が、これからエルサレムで苦しみを受け、殺されると三度告げたにもかかわらず、信仰的な質問でもなく、イエス様についての心配でもありませんでした。最終的な自分たちの地位のことでした。見方を変えれば、二人は、十字架の死が敗北で終わらないであろうと確信していたともいえるのですが、イエス様がいずれ栄光を受け、今までにないような強大な権力を持つような状況を想像していたのでしょう。

この二人の弟子についての描写が、歴史的に正しいことを記しているかどうかはわかりません。しかし、この二人が、イエス様と活動を共にしているにもかかわらず、戦わず受難するキリスト(メシア)という概念を理解しないで従っていたことが示されています。それは、今イエス様をキリストだと信じている人々も、これから信じようとしている人も、この点を誤解しないようにと主張しているのだと思います。それゆえ、物語のイエス様は、「**あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか**」(マルコ 10 : 38) と問いかけます。イエス様の二人に対するこの質問は、十字架にかかわる深い意味を持っているのです。しかし、ゼベダイの子ヤコブとヨハネはその意味を理解していません。「**できます**」と即答するからです。

イエス様が語った、杯と洗礼の意味は、単にイエス様と一緒に食事を共にすることや、イエス様によって体を清めてもらうということではありません。これから十字架の死に向かうイエス様の道に従うか否かと関連している事柄です。この二人は、そのことを理解していなかったのです。理解していたら、そもそも自分たちの地位に関する願いが発生していません。そして、決して即答できるような事柄ではなかったと思います。また、この「杯」と「洗礼」という表現は、教会の sacrament を想起させます。それは、イエス様の「あなたがた」という呼びかけが、物語世界を超えて「マルコによる福音書」の読者にも向けられていることを示します。つまり、教会が行っている sacrament が、単なる新しい儀式ではなく、イエス様の十字架と復活に結び付いていることを確認しているといえるのです。

イエス様は、そのような無理解の二人を、「**確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。**」(マルコ 10 : 39) と答えて、二人の存在を受け入れます。イエス様は、二人の未来について語っているのですが、それがいつの何を意味するかわかりません。そして、より大切なこととして、「**わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ**」(マルコ 10 : 40) と語るのです。「定められた人々に」とは、直訳すれば「準備された人々に」となります。つまり定めるのは、主なる神様です。それが誰で、どのような人々であるかは、主なる神様のみが知っているということです。

さて、この二人の申し出は、「ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めた」(マルコ 10:41) とある通り、他の弟子たちの怒りを引き起こします。二人の抜け駆け行為ですから、怒るのは当然かもしれませんが、イエス様が本格的に十字架の道を歩み始めたとき、とるべき行動ではありません。それゆえにイエス様は、非常に有名で教訓的な言葉を語るのです。

「あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」(マルコ 10:43-45)。

このイエス様の言葉は、人生訓でも、生活訓でもありません。人間社会や人間関係での处世術の類でもありません。また目指すべき倫理的目標でもありません。イエス様の道を歩むための、根本的な事柄は何かを指し示しています。

このイエス様の言葉は、人間の思いと生き方が、力にかかわる構造と切っても切れない関係にあることを示しています。言い換えれば、人間は、高い低い、強い弱いという区別がある世界からなかなか抜けだせないのです。政治、経済、教育、芸術など、人間の行うありとあらゆる営みがこの価値判断を持っています。なぜこのような価値判断があるかという、それが人間に主体性と方向性と力を与えるからです。そしてそのような価値判断は、高いものが良いという単純なものではなく、複雑な構造も持ちます。

この価値判断の中で、人間は、時にプライドを持ち、また時にコンプレックスを持ちます。そして上下を見ながら、主体性を確認し、歩む方向性を定め、そして生きる力や何かを達成した喜びを持つのであり、また挫折や不安も持つのだと思います。そのような中で悩みつつも、自分の目標と課題を見つけて歩むのが人生であるともいえるかもしれません。そして、そのような歩みは決して悪いものではないかもしれません。しかし、そのような世界の中にいるとき、「イザヤ書」が語る「苦難の僕」の存在に気づくことは困難です。また、イエス様の十字架の死は、単なる敗北だと理解されると思います。それは、主なる神様の存在とその愛を真摯に受け止めることが困難であることを示します。主なる神様は、人間が求めるものだけを与えるわけではないからです。

イエス様の十字架の死は、そのような世界の中で、誰もが求めるような願望の到達によってではなく、誰もが避けたいような敗北の姿で、主なる神様の存在と愛を示します。そして、イエス様の復活は、そこにおいて示された事柄が確実であることを裏付けます。そのことを信じる時、常に主なる神様の意思にかなった、真の平和に向けた歩むべき道が示されます。最初の教会の人々は、本日の「イザヤ書」の「苦難の僕」を含んだ『聖書』(旧約と続編)とイエス様の姿から、その信仰に立ち、真の平和に向けて歩み続けました。わたしたちもその信仰に立ち続け歩み続けたいと思います。その歩みの中で、コロナ禍という目の前の課題を超えた、大きな目標が示されると思います。そのために、これからもわたしたちの教会とそこで行われる礼拝を大切にしていきたいと思います。